

## 第8章 河道特性

### 8 - 1 河道特性

鈴鹿川は、底辺が長い三角形の流域をもち、その源を三重県亀山市高畑山(標高773m)に発し、加太川などの支川を合わせて伊勢平野に出て東北に流下し、安楽川を合わせて河口より5km付近で鈴鹿川派川を分派したのち、内部川を合わせて伊勢湾に注いでいる。流域の北側は鈴鹿山麓から発する扇状の台地が波状に広がり、南側は亀山市街地付近より段丘状の平地が開け、海岸に至るまで沖積平野が連続した地形特性を持っている。

河口から内部川合流点付近までは砂泥質の河床であり、河床勾配は約1/1,100程度と緩く、感潮区間に位置し、セグメント2-2となっている。内部川合流点から井尻頭首工付近までは、緩やかに蛇行しながら流下している区間で、河床材料は砂礫質であり、河床勾配は約1/600~800、セグメント2-1となっている。井尻頭首工から直轄区間上流端付近までは、緩やかに蛇行し、瀬淵を形成しながら流下しており、河床材料は砂礫質であるが礫成分が多くなり、河床勾配は約1/200~400、セグメント2-1となっている。さらに上流では約1/100以上の急勾配となる。

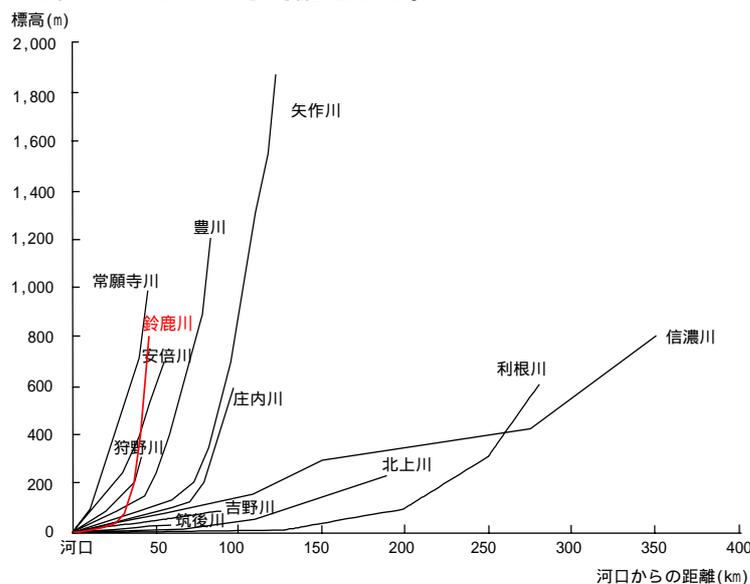


図8 - 1 鈴鹿川と他河川の縦断特性の比較

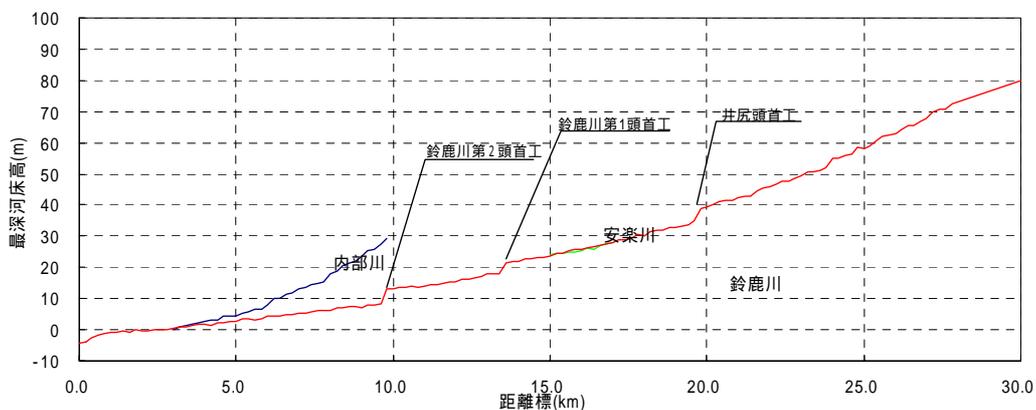


図8 - 2 鈴鹿川縦断図(大臣管理区間)



**鈴鹿川上流部（高畑山）**  
標高 773m の高畑山から急峻な溪谷を蛇行しながら流下している。



**鈴鹿川中流部（21km 付近）**  
支川加太川を合流し、瀬淵や砂礫河原を形成しながら流下している。



**鈴鹿川下流部（4km 付近）**  
鈴鹿川派川を分派し、緩やかに蛇行しながら流下している。



**鈴鹿川河口部（0km 付近）**  
河口部には干潟が形成されている。左岸には砂州が発達している。



**鈴鹿川派川河口部（0km 付近）**  
河口部には干潟が形成されている。左岸には砂州が発達している。

## 8 - 2 河床の経年変化

鈴鹿川は、源流域を構成する砂岩、花崗岩類の風化が著しく、土砂流出が多かったため、昭和 25 年頃までは河床がかなり高く、天井川であった。しかし、その後上流山地では直轄砂防事業が実施されるとともに、昭和 40 年代以降砂利採取も盛んに行われたことから、現在では昭和 20 年代と比較すると河床低下を起こしたが、近年は安定傾向である。

直轄砂防事業は、昭和 19 年に着手され、内部川や御弊川、鍋川などにおいて流路工、砂防ダム等の砂防施設が整備され、昭和 45 年に完成した。

また、鈴鹿川の砂利採取は、昭和 40 年代から行われており、昭和 50 年代中頃に最も盛んとなっている。昭和 42～平成 16 年の間の砂利採取量は、本支川合わせて 230 万 m<sup>3</sup> に達している。

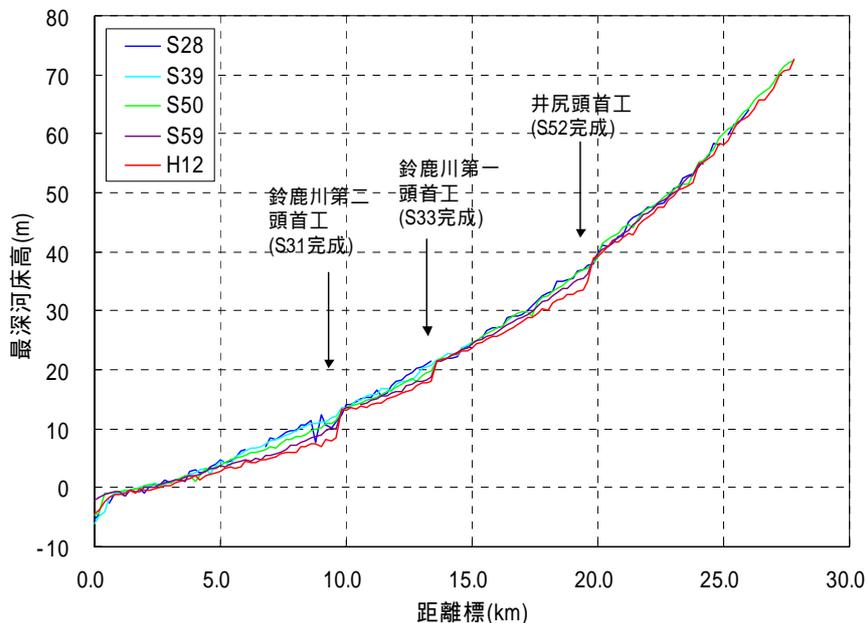


図 8 - 3 鈴鹿川の最深河床経年変化

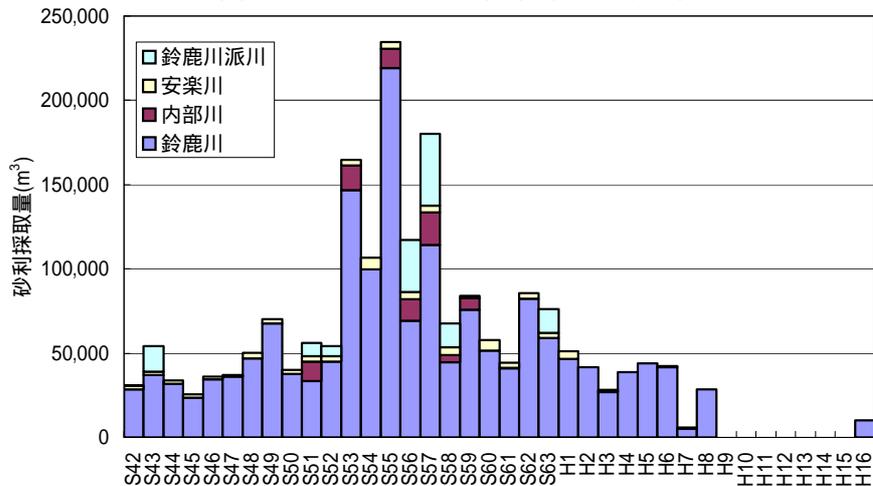


図 8 - 4 鈴鹿川の砂利採取量

河床変動量の変化を見ると、鈴鹿川では平成9年に砂利採取規制が行われるまでは、砂利採取の影響や砂防事業の効果による流出土砂量の減少のため、河床低下が発生している。平成9年以降は河床高の変動は安定した状態となっている。

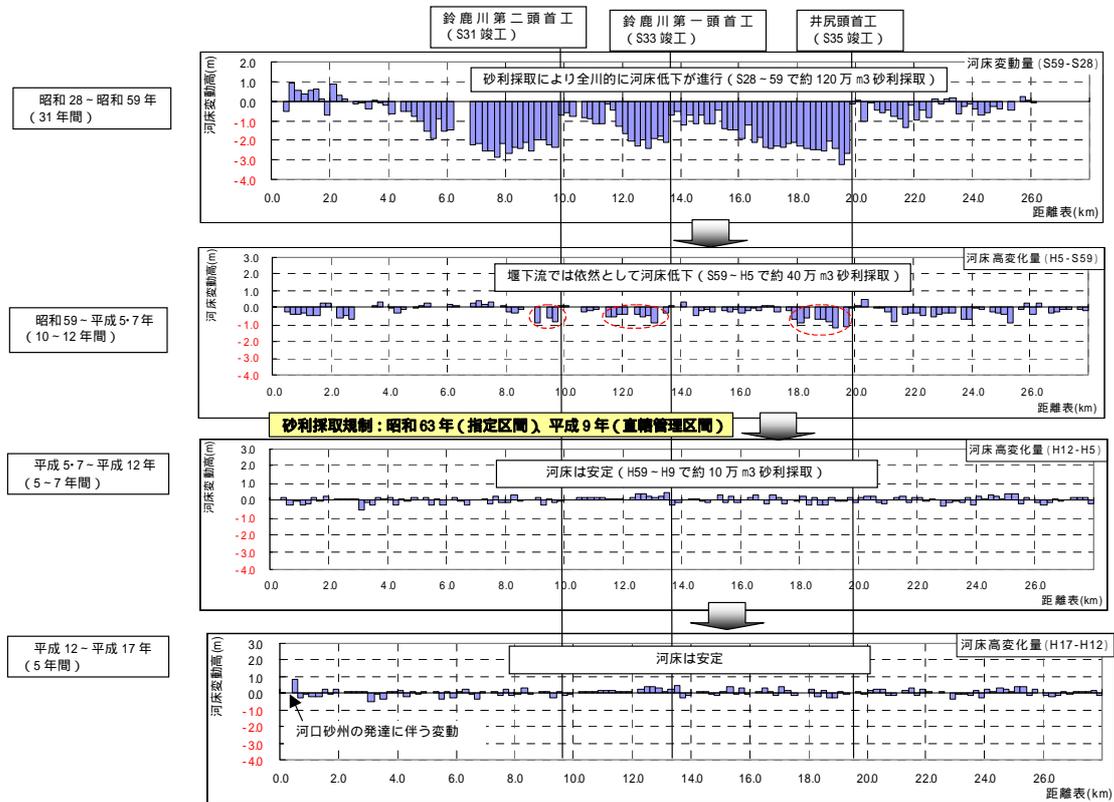


図8-5 鈴鹿川平均河床高変動の経年変化図